

パパママサミット 2017
(やさしさ+ちょっとの想像力) × 行動 = 納得のパートナーシップ
～我が家流 ライフ・ワーク・バランスをさぐる～
平成 29 年 11 月 25 日

基調講演
「働いて、家族と生きる」
小島 慶子 氏 (タレント、エッセイスト)

今から 50 分、極めて個人的な話をいたしますが、たまたま私の生まれた世代と時代が色々なことはざかいきの端境期に当たっていたので、結果として本質的な問題が私の人生にも起きていたんだなと、改めて思っています。

私は 1972 年生まれですので、世代的には団塊ジュニア世代に当たります。

両親は戦争が終わった時にお腹を空かせた子供でした。戦後の苦労した体験がありましたので、9 歳年上の姉にも私にもこう言って育てていました。「女の子は良い学校を出て、良い会社に入って、その良い会社の中で最も出世そうな男をつかまえて、海外転勤、できれば北半球、できればアメリカとかヨーロッパに転勤するのが一番幸せな道である」。それは彼らが本当に貧乏のどん底からそうやって幸せになった実体験だったので、娘たちには是非同じ道を歩ませたいと思ったのはまあ仕方がなかったのだと思います。

姉はバブル世代ですのでギリギリそれを成し仰せました。私は私立の女子校から共学の大学に行きました。そこで大手都市銀行に内定している 4 年生を見つけて付き合ったのです。世間知らずでしたから、“これでお姉ちゃんと同じ銀行員が手に入った！やった！私の人生勝ちだ！”と思いました。でも半年間デートして、やっぱり前の彼女が忘れられないと言われフラれました。

ずっと泣いていたのですが、泣いているうちに、私は彼のことが恋しくて彼に傷つけられたことが悔しくて泣いているんじゃないということに気が付いてしまいました。泣いている一番の理由は銀行員の妻の座を手離してしまったことだったんです。本当なんですよ。

私はそれで泣いているのか、と自分でがっかりしました。私が育った暮らしは、専業主婦と子供 2 人を養える程度の収入のある男の人が与えてくれる暮らしで、それに慣れているし、それしか知らなかったのです。その時の私はこれが最低限の暮らしだと思ったんですね。けれども、共学の環境に身を置いてみて、私を今と同じかそれ以上の生活に引き上げてくれるような男を、どうやら私は恋愛という戦場で勝ち取れそうにもないことが分かりました。ではどうしよう、と思ったのです。

当時は男女雇用機会均等法施行から 6 年ほど経っていましたので、総合職の女性が登場し始めていました。その姿を見て、なるほど、私は引き上げてくれる男を探さなくても、パパと同じような仕事に就けば良いんだと気付いたのです。自分に経済力さえあれば、男の人を年収や肩書で選ばなくて良い。むしろその人と結ばれるためなら死んでも良いと思える人とでも結婚できるんだ。だったら恋愛の荒野で戦うよりも、就職の荒野で戦う方が

まだ勝てるんじゃないか。このような思い込みを基に、就職先を探してみました。

成績優秀でもなくコネもない私でも総合職に就けるところはないだろうかと思っていたら、ちょうど3,4年生向けの「マスコミセミナー」というのが学校のキャンパス内でやっていたんですね。1年生でしたが潜り込んで、マスコミセミナーを聞いてみました。そうしたら、どうやらマスコミで女性が総合職に就くには難しい試験があるけど、大学の成績は「全優」じゃなくても大丈夫らしい、それからアナウンサーというのは、他と違って実技とか容姿とか面接が中心らしい。にもかかわらず、待遇は男性と全く同じで、いわゆる終身雇用の保証された組織の一員として正社員の立場が手に入るらしい、ということに気付いてしまった。これは私が親からも将来のパートナーからも経済的に自立して、多少なりとも自分の特技を活かしながら就ける唯一の仕事なのではないかと思い立ったわけです。

大学1年の終わりにはアナウンサーになろうと思い、色々な人の話を聞きました。これからは女の人には経済的に自立して、一生働き続ける働き方は夢物語ではないんだな、私の考え方は時代の最先端を目指しているんだな、と勇気付けられました。それで就職試験を受け、TBSに通っちゃったわけですね。役員面接だったかな、「君、あれだろ。こんなアナウンサー受けるなんて自分のこと才色兼備だと思ってるんだろ？」と言われて、私は「はい、ちょっと思っています」と答えました。アナウンサーの試験なんて才色兼備だと思っている子しか受けに来ませんよね。どうせ本当だしと思って答えたら、通ってしまったんです。そして、それが合格の理由だと思ってしまったから、就職した後も本当のことを言えば良いやと思ったわけですよ。

いざ働き始めてみたら、待遇は完全に男性と同じです。けれど、求められるロール（役割）は「超・女子」でした。やっと気付きました。これは私に一番向いていない仕事だった。何やっても空回りです。

今言ったように、本当のことを言って受かったんだから本当のことを言うことを求められていると思って、自分の意見をどんどん言っていたら「小島生意気」「新人らしくない」「偉そう」とかね。

入社したとたん、とにかく評判が悪かった。しまった、私は適性がないところにきてしまった。本当は、人気女子アナってのになりたかったです。週刊誌の好きな女子アナランキングで上位に入りたかった。けれど、どうやら私にその適性はないんだ……ということに早々に気づき、それを受け入れるのにかなり苦しみました。その苦しみは、一言で言うと、「憎悪」だったんですね。何に対する憎悪だったんでしょう。それは女であることに対する憎悪だったのか、いわゆるおやじ社会・男社会と言われるようなものに対する憎悪だったのか。

2年、3年やっていると、人気アナでないにしても“女子ロール”は技術的にできるようになります。そうすると、仕事も評価されるようになります。それは、自分が憎悪を抱いている価値観に順応し、その求められるロールをある一定以上のクオリティで演じることによって、評価されるということです。そうすると、うまくできるようになればなるほど、自分を誇れなくなってくる。この構図は何だろうと思いました。

こうしたことは、アナウンサーという職業にだけあることではないと思います。いわゆる男性が大多数を占めている職場で働く女性は、“おやじ化”つまり、男性優位の価値観を受け入れ、時にはその理想の女性像を体現しないでは仕事にならない、だけど“おやじ化”して仕事ができるようになればなるほど、自分を誇れない。自分の中にすごくねじれた感情が居座っている。二つに引き裂かれるような気持ちを多くの働く女性は味わっているのではないのでしょうか。

先日の、広告代理店の若い女性社員が自ら命を絶ったニュースを読んだ時にも、私は彼女のような若い世代の中にも、滅私奉公の「男並み」の働き方と、男社会で求められる女子ローンを両方やれという「無茶振り」が今なおあるんだということに絶望を覚えました。

この、私の中にある憎悪は、何に対する憎悪だったのでしょうか。前は、それは男性に対する憎悪なんだと思っていたんです。でも、そうではないということに気が付きました。

気が付くきっかけは、一つ目は子供を産んだことです。子供を産んで、私は夫と共働きで子育てをやりました。

夫はTV制作会社の社員で比較的時間に自由がある人だったため、一生懸命時間のやりくりをして保育園の送迎や料理、洗濯などの家事は完全に二人で入れ替え可能で回す状態になった。それはすごくラッキーなことでした。でも、働くのも家事をするのも育児をするのも二人とも同じようにやっていると、しんどさも同じなのです。なぜ働きながら子供を育てるって、こんな大変なんだろう。何でそれに対して無理解だったり偏見があったりするんだろう。

例えば子供を保育園に入れている＝可哀想だねとか、子供を迎えに行く男＝かみさんの尻に敷かれているとか。制度を利用して2時間早く帰りますと言うだけで「アナタやる気ないのね」と先輩の女性に言われるとか、私と夫が直面するしんどさは同じだったんですね。

私の両親は、専業主婦と稼いでいる非常に忙しい夫、という組み合わせでした。母はいつも父に対する恨みを言い、父は母に対する恨みは言わないけれど、会社に行く朝は常に孤独な怖い顔をしていました。今から人を殺しに行くみたいな顔をしていました。

父が何かと闘っていて孤独なのは分かっていました。でもそれは子供の自分とは関わりのないことだと思っていた。

やがて自分が共働きになってみると、父が言っていた接待で食べるご飯のまずさも、母が味わった一人で家事・育児を全てやらなければいけない地獄のような大変さも、分かりました。それを夫婦で味わったのです。あ、男だから苦しい、女だから苦しいって問題じゃなかったんだ……。働くしんどさと育てるしんどさ両方いっぺんに味わっているんだ私たち……。私たちは辛さを嘆きあう仲間、ある意味“同志”がいたのでまだ良かったと思います。そういう経験があったので、「敵」は男とは限らないのかも、ということに気が付きました。

憎悪について気付く二つ目のきっかけは、2013年に夫が仕事を辞めた時です。彼が47歳くらいの時、「俺は、テレビのスタジオと編集スタジオと家、この3か所をぐるぐると回って、このまま仕事人生が終わってしまう。生きるって何だ」ということに直面してしまったんですね。

私はそのちょっと前の2010年に会社を辞めました。会社員だった私は夫にとってみたら、収入の安定した良い配偶者だったと思うのですが、私が辞めることを夫は受け入れてくれました。じゃあ、夫が仕事を辞めて人生を見つめ直したいと言った時に「ダメよ」とは言えないなあと思って、今度は私が「良いわよ」と言いました。

その後、最初の1年がひどかったです。私の中に封じ込められていた男性に対する偏見が一気に噴き出しました。私は人生で初めて稼ぎも肩書もない丸腰の男を目の前にして、その男をいじめたんです。本当にひどかったと思います。仕事から帰ってきて「あ〜っ！働くのって大変！働くのって大変！！あなたは良いわねえ、それから降りたんだもんね！」という言い方をしたり、一緒に買い物に行って彼が何か買う時に「じゃあそれ買ってあげる」といちいち言ったりとか。

私はかつて父に「誰のおかげで飯が食えてると思う？誰のおかげで生きていけると思う？」と言われた時に、どれだけ悔しかったか。他に生きていく方法がない人間に対して「誰のおかげで」と恩を着せて、しかも威圧的にそれを言うっていうのはどれだけの暴力かということを、やられた立場として知っていたはずなのに、同じことを夫にやったんです。

すごくショックでした。やっぱり私の中に、根深く根深く、「稼ぐ男」に価値がある、「肩書のある男」に価値があるっていう価値観が巣食っていたということが分かりました。そんなものから自立したつもりでいた、そんなものはとっくの昔に捨て去ったつもりでいた。軽蔑すらしていた。だけど、私の中にはその価値観がずっと残っていたんですね。そうしたらある時夫が、「どうも慶子は、僕に向かって言っているような気がしない」と。「それ誰に言いたい。僕じゃない誰かに言いたいのを僕に降ろしているように見える」と言ったんですね。

はっとしました。ぐるぐると記憶を巻き戻したら、「誰のおかげで食えてると思っているんだ」と言った父に「ふざけんなよ！」と思った気持ちを、そのまま夫に言うことで憂さ晴らしをしていたんですね。恐ろしいことです。

「お前なんか女子らしくねえよ」とか「新人らしくない」とか「生意気」とか、「お前が何考えているかなんて誰も興味ないんだよ」とか、「言われたことだけやってれば良いんだよ」とか、これまでいろいろな男の人に言われてきた言葉がずっと自分の中に残っていて、いつか自分がそれを誰かに言える立場になったら言ってやるんだという暴力の衝動が眠っていたんですね、私の中に。男に対する復讐を、夫の一身に降ろしていたのです。このことを夫が言ってくれたおかげで初めて気付くことができました。夫にはすごく感謝しています。

その後、どうにかして昔みたいに彼のことをリスペクトしながら一緒に仲良くやっていきたいと思ったので、会社を辞めたからこそこんな面白いことができる、ということをやってみよう！と提案しました。それで、オーストラリアのパースに教育移住しました。4年経った今となっては、家族全員にとってすごく良い決断だったと思います。あなたが仕事を辞めてくれて本当に良かった、こんな思いがけない展開が人生に訪れるなんて、ということが言えたのは、実は彼が仕事を辞めてから3年以上経ってからです。本当に、時間がかかりました。

今、私は夫と出稼ぎのしんどさをシェアできません。それがすごく辛い。言いながら若干泣きそうになっています。しょうがないんですね、環境を変えてしまったから。

前は共働きでしたけど、今はたった一人の肩に一家の経済的な重みがかかるプレッシャーとか、仕事で色んなストレスがあって、でもそれを誰とも分かち合えないというこのしんどさは、初めて経験しました。

けれど父は、そのしんどさの中を生きていたのだと思います。だからあんなに会社に行く時に怖い顔をしていたのだと思います。深夜帰ってきて一人でご飯を食べる時の父の顔は、あんなに孤独な顔だったのだと思います。

私は一回でも分かろうとしたことがあったか。ありませんでした。男は働いて当たり前だと思っていました。それが男だというものだと思ったし、それに耐えるのが男だと思っていました。一度もそれに対して可哀想だなとか辛いのかな、なんて思ったことはなかったのです。

けれども学生時代、自分が毎朝乗っている満員電車の中に、激しい恨みと怒りが満ちているのはなぜだろうと思いました。シーンとして誰一人文句を言わないのに。この満員電車に満ち満ちている無音の怒りは、誰の何に対する怒りなのだろうとずっと感じていました。私も怒りながら、痴漢の手を叩き払いながら。

今になって思うのは、あれは「こんな思いをしながらも働かなければいけないのか」、「こうまでしないと生きていけないのか」というやり場のない怒りだったのだと思います。

文字通り寝の間もないような働き方、会社を辞めて独立した私の場合は個人的に選んだ道ですが、選ばざるを得ない形でその状況の中で生きている男性も女性もいると思います。

経済は右肩上がりだで男が働いて女が専業主婦でうまくやっていた世代と、今の共働きじゃないと回らない世代とでは、ものすごく置かれている状況が違い、世代間ギャップがあるでしょう。

でも、「こんな目に遭ってまで働かないといけいないのか、働きながら家族と生きる、働きながら人生を大切にするといい、人として最低限あってしかるべきものが何でこんなに難しいんだよ、おかしいじゃないか、こんな世の中！」っていう怒りは通底しているのではないかと思います。

本当は、世代を越えて、私たちはその怒りをシェアできるはずなのに、男はこうあるべき、女はこうあるべきという文脈の中に封じ込められているから、間違った相手にぶつけてしまっているのではないのでしょうか。

私たちが二世帯、三世帯にわたってシェアしてきた、それが当たり前と考えられてきた、働くということ、生きるということ、我慢するということ、もういい加減書き変えても良い時期に来ているんじゃないかなということに、やっと思い至りました。

家族が多様になってきた、生き方が多様になってきたと言われています。多様になればなるほど人のことが分からなくなり、多様になればなるほど話が通じなくなるものだと思います。話が通じなくなることを前提に、でもお互いに嫌な思いをせず、それぞれが困っていることを解決して生きていけるような世の中にするためには、もちろん制度も必要だし、物を知ることも必要です。そして、答えが出なくても対話するということが必要なんだろうなあと思います。

きれいごとみたいですが、家族の中であっても、こういうパブリックな場所であっても、「どうしたら良いんだろうね～。生きるというのは何でこんなにしんどいんだろうね～。あなたと私のしんどさはこうも違っているとしても、お互い多少なりとも幸せになるにはどうすれば良いんだろうね～」ということを話す。語ることをやめない。語る者の口を塞がないということが重要なのかなと思っています。

だから、私もこうやって超個人的な経験で、中途半端で、道半ばの人生ではありますが、今日皆さんの前で、夫とのことを始め色々なこともお話しできたのは有難いことだなと思っています。

これから、パネルディスカッションもありますので、是非皆さんもお家に帰られてから、ご家族の方でも良いですしお友達でも良いですし、誰かと話をしてみてください。

“何だろう、私とあなたのしんどさって。何だろう、私とあなたの幸せって”と。そこに違いがあることに気が付くことは、豊かなことなのだという体験を一人でも多くの人がすると、もうちょっと日本での呼吸がしやすくなるのかなと思います。

時間がきてしまいました。本日はありがとうございました。

—終了—